

楓
はるひ

* 人物表

早川さくら (一八) 高校三年

鈴木拓郎 (二二) 両親と一緒に電機店を経営。

黒田哲雄 (六八) さくらのボランテニア先の

病院に入院している。

早川美恵子 (四八) さくらの母

矢野真紀 (二二) 介護福祉士、黒田が入院し

ている病院に勤めている。

黒田ユキ (六八) 黒田の妻。

看護師

波の音、砂浜を歩く音。

早川さくら（一人）（N）『波の音は嫌い。心がざわざわするから。どうしてこんな田舎町に生まれちゃったんだろ？』

童謡『むすんでひらいて』が流れる。

作業療法士「はい、音楽に合わせて、むすんで、ひらいて」

老人たちのざわめき、音楽に合わせて歌っている。

看護師「ボランティアの早川さくらさんね」

さくら（N）『高三になった今年の春から老人病院でボランティアをしている』

看護師「あちらが黒田哲雄さん。脳梗塞の後遺症で左半身にマヒが残っているの。早川さんにはお話相手になっていただきませう」

さくら（N）『車椅子で窓の外の海を眺めていた白髪の老人はゆっくりこちらを振り向いた』

さくら「おじいちゃん、よろしくお願ひします」

黒田哲雄（六八）「私に孫はいない・・・」
さくら「はあ？」

黒田「君のおじいちゃんではない」

さくら（N）『このクソジジイ！』

看護師「（声をひそめて）ちょっと気難しくて精神的に不安定になる時もあるけど、頭はしっかりしてるし、悪い人ではないから」

看護師の足音、去る。

黒田「海が見たい・・・」

さくら「海って、お、黒田さんが今、見てるのが海じゃないですか」

さくら（N）『病院は高台にあつて、窓の外には太平洋が広がっている』

黒田「違う、これじゃない、これじゃないんだ！」

衝撃音。

電機店、有線が流れている。

鈴木拓郎（二二）「真紀さん、このMDプレーヤー壊れてますよ、直すにしても、型、古いから部品あるかなあ」

矢野真紀（二三）「そっか、買わないとダメか。ねえ、このお店から買うから、今度、デートしよ」

拓郎「え、デートですか？」

さくらの足音。

拓郎「さくら！」

さくら「拓兄ちゃん」

拓郎「ボランティア始めたんだって？ えらいじゃん」

さくら「べつにー。大学、推薦で入る時、有利なんだって。それだけ」

拓郎「やっぱ、東京の大学行くのか？」

さくら「田舎がいやなの。拓兄ちゃんみたく、家を継いでここで暮らすなんて耐えられない」

拓郎「きつついなあ」

足音、去る。

真紀「拓兄ちゃんって、妹じゃないわよね？」

拓郎「隣の子なんですよ。お互い一人っ子だから兄弟みたいになっちゃって」

真紀「ふーん。ちょっと生意気じゃない？」

拓郎「確かになあ。あつ、緑が丘病院って真紀さん勤めているところですよね？彼女そこでボランティアしてるんです。よろしく頼みます」

ドアを開く音。

さくら「ただいま」

さくら(N)『出迎えてくれる人はいない。物心ついた時から両親とも働いていた』

電話のベル。

さくら「早川です」

電話の声「早川建設の早川さんのお宅ですよね。こちら朝日信販ですがご融資したローンの件で(FO)」

さくら「父も母も留守にしています」

受話器を置く。

さくら(N)『この家を早く出たい』

音楽『結んでひらいて』。

黒田「山をねえ、越えて越えて行ったところに海があるんだ。山奥の、高見という村からは何十キロも離れててねえ。車なんてとんでもない、バスもなかった。初めて海を見たのは小学校の修学旅行の時だったよ」

さくら「それはどのお話？」
黒田「静内のずっと奥、私はそこに住んでい

た。ペテガリというきれいな山があったよ。終戦の年に引揚者が入植した開拓村だった」

さくら「ここより田舎？」

黒田「ああ。電気も水道もなかった」

さくら(N)「ゲツ。絶対勘弁」

黒田「あの海はどこにいったんだ、海が見たなあ」

さくら「(つぶやくように) 見えてるのに」

足音、来る。

真紀「あなた、鈴木電機の前にはいたでしょ」

さくら「あの時の・・・」

真紀「内申書、よくしたいからボランティアに来てるんだって？ ちゃっかりしてるわ」

さくら(N)『何？ 突然。私、喧嘩売られてる？』

真紀「東京に行ってもね、結局は戻ってくるのよ。あの黒田さんだって、東京の大企業の部長だったらしいけど、ぼろぼろになつて帰ってきたわ」

さくら「ひどい・・・」

真紀「本当のことだもん。子供はいない、奥さんに見放され、行くことなく帰って

きたのよ」

ドアが開く音。

早川美恵子(四人)「さくら帰ったの？」

さくら(N)『珍しい、ママがいる』

さくら「うん」

美恵子「(泣き声) お父さん、いなくなったのよ」

さくら「えっ！」
美恵子「会社倒産しちゃったの。お父さん失踪したのよ！」

さくら「なんで！ 大学行けないじゃない！」

美恵子「(泣き声) さくらったら、お父さんがいなくなっちゃったっていうのに、自分のことばかりなの？ 心配じゃないの？」

波の音。

さくら(N)『パパは失踪したままで、ママは腑抜けになった』

音楽『むすんでひらいて』。

黒田「どうしました？ 何か嫌なことでもあったのかな。いつもと違う感じだ」

さくら (N) 『黒田さんのこと、なめてた』

さくら「お父さんの会社が倒産しちゃって、いなくなっちゃって」

黒田「ほう、それは大変だ」

さくら「大学にも行けないかも・・・夢だったのに」

黒田「何を勉強するのが夢だ？」

さくら「勉強って・・・この町を出ることが先決なので・・・夢って・・・」

黒田「夢はなんだ？ あなたの」

さくら「夢、ですか？ この町を出て、東京の大学に行って、OLになって、結婚して専業主婦になって都会にずっと住むこと」

黒田「ほっほっほ(笑う)もつと昔は？ 子供なりたかったのは？」

さくら「・・・お花屋さん・・・」

黒田「それはいい。花屋は大学いかなかったてなれる」

さくら「そうだけど・・・でも、今はお花屋さんよりもとにかくこの町を出たいの。」

黒田「何もないこの町を出たいの」

空だからだ・・・私も同じようなものか・・・ああ、海が見たい。あの海を」

さくら「今見ているのが海なのよ！」

足音。

真紀「黒田さん、あんまり興奮すると血圧上がりますよ。落ち着いてね。早川さん、あなた何か言ったんじゃないの？」

さくら「何もいってません」

真紀「倒産しちゃったんだって？ 大変ね。でも黒田さんに当たることないでしょ」

さくら「そんなことしていませんって！」

真紀「大学諦めたんなら、偽ボランティアもやる必要ないんじゃない？」

さくら「諦めてません！」

商店街のざわめき。

拓郎「今、帰り？」

さくら「うん」

拓郎「家、大変なんだろう？ ボランティアなんかしてて大丈夫なのか？」

さくら「・・・うん」

拓郎「うちの親父もお袋も心配しててさ、力になるって、言ってるから」

さくら「ありがとう」

電話のベル。

美恵子「お金は必ず、お返しします。ただ、夫が失踪してしまっただうしようもないんです！」

叩きつけるように電話を切る。

美恵子「さくら、やっぱり無理だわ。あなたを大学にはやれない・・・」

さくら「どうして！」

美恵子「わかるでしょ！」

さくら「わかんない！」

美恵子「この町で働いて一緒にお金を返していつて頂戴」

さくら「嫌よ！」

音楽『むすんでひらいて』。

車椅子を漕ぐ音。

黒田「海はどこだ？ 山を越えて歩いて歩いて行ったあの海を見たいんだ。どこにあるんだ」

窓を開ける音。

黒田「ここじゃない、ここじゃない」

車椅子を回す音。

車椅子が引掛かり、椅子ごと落下する。

黒田「ぎゃあー」

救急車のサイレン。

さくら「あの黒田さんは？」

看護師「黒田さんね、今朝、三階の非常口から車椅子ごと落ちて大変だったのよ」

さくら「具合は！」

看護師「幸いどこも怪我がなくて。ただ頭を打ったので脳外科のある赤十字病院に運んだの」

看護師の足音、去る。

真紀「自殺じゃないかって」

さくら「嘘！」

真紀「体は自由にならないし、孫みたいなのんタには馬鹿にされるしで、いやなっただじゃない？可哀相なもんね、死ぬことすら出来やしない」

さくら、走る。

黒田「あなた、来てくれたのかい？」

さくら「家、近くだから」

黒田「見舞い客なんて初めてだな」

さくら「体大丈夫ですか？」

黒田「なんともないみたいだ」

さくら「どうして、落ちちゃったんですか。自、自殺じゃないですよ？」

黒田「外をね、見ているうちにどうしてもあの海を見たくなくなってしまった・・・気がついたら、落ちていたんだ」

チャイムの音。

教師「やっぱり大学は無理そうか？」

さくら「はい・・・」

教師「残念だな。進路はどうする？」

さくら「まだ、決められません」

教師「ニートだけにはなるなよ」

さくら(N)『かじるすねありませんから』

音楽『むすんでひらいて』。

真紀「あら、もうこないかと思った。大学諦めたってきいたけど？」

さくら「その通りですけど」

さくら(N)『確かに最初は不純な動機で始めたボランティアだったけど』

車椅子の音。

さくら「黒田さん、戻ってきたんですか？」

黒田「ああ、心配かけたね」

さくら(N)『何となく黒田さんと話をするのが癒しになっていた』

さくら「よかったですね」

黒田「・・・あの海はまだ見れないんだ」

窓を開ける音。

さくら「危ないです、止めて」

黒田「あの海はどこにいったんだ？」

さくら「・・・海に行きますか？」

黒田「はい？」

さくら「海に行きましょう」

波の音。

車椅子を押す。

黒田「車椅子、重いかい？」

さくら「(歯を食いしばる) うくん、大丈夫です」

波の音、どんどん大きくなる。

さくら「黒田さん、これが海」

手で水を触る音。

黒田「ああ、確かに海だ・・・あの時と同じだ。嬉しくて眠れなくて、米のおにぎりをもって・・・十二だった」

さくら「十二？ それまで海を見たことがなかったの？」

黒田「ああ。修学旅行で初めてみた。先生が”どうだ、大きいだろう”といった：海というものはこれほど綺麗だったのかと思つたよ。」

村から見えるペテガリと同じくらい綺麗だった。すごいと思つた。それなのに故郷をふり捨てて、出て行つたんだ、私は！　こんな海じゃなかった。綺麗で明るくて、広くて・・・海はあの村の中にあつたんだ！　電気もなく水道もなく、父がいて母がいて、友達がいて、馬がいて、鳥がいて、じゃがいもの花が咲いて、あの村の中にあつた！　今、わかつた！」

さくら「・・・そこには行けないの？」
黒田「・・・もう随分前にダムの下に沈んでしまったんだ・・・だが私の家の跡はあるかもしれない。村のはずれの高いところにあつてね、さくらの木と松の木が植わつてた」

波の音、ひととき大きくなる。

さくら「そろそろ帰りましょう、黒田さん・・・くうー、うーん、重い・・・きや、冷たい」

さくら(N)『波が高くなつてきて、しづきが飛んできた。車椅子は砂に絡んで全くすすまない』
さくら「きゃー」

さくら(N)『波が大きく足元を洗つた』

車のエンジン音。
遠くから、拓郎の声。

拓郎「おーい、さくら、何やってるんだ」
さくら「拓兄ちゃん、助けて！　車椅子がはまつて動けないの！」

拓郎、走る。
車椅子が回りだす。

拓郎「(うめきながら) 砂浜に車椅子つて考えろよ」

さくら「(泣き声) だって、どうしても海、見せてあげたかったの」
拓郎「そりや、わかるけどさ・・・」

黒田「(つぶやくように) 海はあの村の中にあつたんだ・・・」

音楽『むすんでひらいて』。

真紀「拓郎さんが通りかからなかったら、死んでたかもしれないのよ！」
さくら「・・・」

さくら(N)『同じことを婦長さんにも言われた』

真紀「中途半端な気持ちでのボランティアなんて有難迷惑よ。もうこないで」

ブリッジ。

鈴木電機店、有線が流れる。

さくら「拓兄ちゃん」
拓郎「どうした？」
さくら「高見つて遠いの？」

車のエンジン音。

拓郎「結構走つたぜ、こりや、遠いよ。静内駅まで50キロ近くあるよ」
さくら「昔はバスも車もなかったんだって」
さくら(N)『次の休みの日、拓兄ちゃんは車で黒田さんが住んでいた高見という集落まで連れて行ってくれた。山はどんどん深くなつていく』

拓郎「もうボランティアはやめたんだらう？」

さくら「やめさせられた」
拓郎「うん・・・だったらさあ、もう関係ないじゃん」

さくら「受験勉強やめたから暇だし。黒田さんの海・・・家を、私、見たかったの」
拓郎「ダムの下に沈んだって」

さくら「でも家は高いところにあっただって
った」

拓郎「残ってるのか？」

さくら「それはわかんないけど、家の前には
さくらの木と松の木があっただって」

ブレーキの音。

拓郎「あれ？ゲートしまってるぞ、通行止め
じゃないのか」

車のドアを開ける音。

拓郎「えーと、書いてある。“ 昨年台風二
三号で土砂崩れのため通行止め” だっ
さ。高見までは行けないらしい」

さくら「そんな・・・ここまで来たのに。見
ることも出来ないの？ 黒田さんの海、
見たかったのに（涙声）」

風が急に強く吹く。

(回想)

風の音に馬の嘶きがかさなる。

パチパチと薪がはぜる。

子供たちの笑い声。

川の流れる音。

黒田(十二)「海、見るの、楽しみだあ」
友人「ひろいべなあ」

黒田「おつきいべなあ」

友人「ペテガリよりか？」

黒田「山とは違うべさ」

吹雪の音。

男「もうだめだ、この天気じゃ今年も何にも
とれねえ、借金が増えるばかりだ」

女「子供らに食べさせるものが何もない」

黒田(十五)「こんなところ、出て行ってや
る。もういやだ！」

吹雪の音。

勢よく川が流れる。

(回想終了)

再び風の渡る音。

拓郎「どうした、ぼんやりして」

さくら「(我に帰る)・・・もうここにも
“海”はないんだね・・・」

音楽『むすんでひらいて』。

さくら「黒田さん」

黒田「来てくれたのかい」

さくら「ボランティアは首になっちゃったけ
ど・・・今日はお見舞いです。この間はご
めんなさい」

黒田「いや、楽しかった・・・」

さくら「高見、行ってみました」

黒田「私の家はあっただろるか？」

さくら「・・・通行止めになつて、たどり
つけなかったの・・・」

黒田「そうか・・・」

遠くから看護師が声をかける。

看護師「黒田さん、奥様が」

黒田ユキ(六八)「お父さん。帰ってきたわ。
ほれ、東京で手術してすっかりよくなっ
から」

黒田「かあさん・・・」

ユキ「また、お父さんとずっと一緒にいられ
ますよ、あらお父さん、お客さん？」

黒田「ボランティアしてくれていたさくらさ
ん」

ユキ「まあ、ありがとうございます。お父さ
ん、わがままだから大変だったでしょ、
退職してから突然北海道に住むっていつ
たりして、本当に自分勝手なんですよ」

さくら「はあ・・・(小声であの、奥さんい
ないって聞いてたんですけど)」

看護師「難しい手術で東京の病院に入院して
いらしたの。よかったわ、よくなられ
て」

スキップ、鼻唄。
有線の音楽。

さくら「拓ちゃん！ 黒田さん、奥さんいたんだよ！ 今日、病院に来てたよ」

拓郎「それどころじゃないんだよ、さくら、どこ行ってたんだ！ 親父さん、帰ってきただぞ」

さくら「えっ！」

荒々しくドアを開ける。

さくら「パパ！」

音楽『むすんでひらいて』。

黒田の妻「さつきの子、めんこかったわね」

黒田「海を見せてくれた・・・“海”がどこにあるかわかったんだ・・・あの子が連れて行ってくれたんだ」

黒田の妻「そう・・・お父さん、退院したら、一緒に行きましょう、そこに」

黒田「ああ」

ブリッジ

さくら (N) 『パパが帰ってきた。負債は三人で頑張って返していくつもり』

さくら「いらっしやいませ。花束ですか？」

さくら (N) 『私はお花屋さんでアルバイトを始めた。“海”は今、私の中にある』